

2011年7月27日

## 空襲で母を失う

小泉英子、〒260-0842 千葉市中央区南町 2-19-5

これは小泉英子さんから聞き取りした内容をチェックしてもらった手記です。許しを得て文章にしました。私は、千葉市空襲で犠牲になった人の氏名を調査し、名簿を作成し、記念碑を作る運動をしています。みなさんのお話を聞かせてください。

千葉市大空襲とアジア・太平洋戦争の記録 100人証言編集委員 伊藤章夫 08053053739

私は当時19歳で、千葉市吾妻町2丁目の家業の旅館業を手伝っておりましたが、戦争が激しくなると女子挺身隊として逋信省電報局の配達員に動員されていました。空襲に備えて電報・電話局の通信機械は、当時、数少ない鉄筋コンクリートの千葉県教育会館の2階に疎開していました。家族は父母、妹2人、弟1人、私の6人が一緒に生活していました。家にも防空壕が掘られていました。兄は徴兵されて情報関係の内地勤務でした。

1945年7月6日、深夜大規模な空襲が始まりました。米軍は千葉市の周辺に焼夷弾を落とし、中央部に小型爆弾を投下しました。周りにも火が燃えは始めました。突然の出来事なので、記憶が正確ではありませんが、空襲が激しくなると父は家族に避難を指示したと思います。父は最後に仏壇の遺牌を持って逃げました。津波避難のように「てんでこ」でした。既に、**母関チカ**と向かいの家の奥さん**星さん**は私の家の土間で倒れていました。私には妹1人と向かいの家の女の子をつれて逃げるように言いました。2人の女の子を連れて火の中を柏戸病院の方面へ逃げました。気がつくと妹と私の2人でした。

夜が明けると、長洲町の人力車屋さんが私の左足から出血していると注意されて、そのまま、臨時病院になっていた教育会館に運んでくれました。足には小型爆弾の破片が突き刺さっていたと医者と言いました。空襲時、蒲団をかぶってうずくまっている時に受けた傷でした。そのまま、そこで、1か月入院しました。入院中に戦争が終わりましたが、私が戻らないので家族の者はとても心配したと言うことを後で聞きました。我が家は既に焼失していました。

8月末に退院後、再び家族に会った時、母が空襲でなくなったと言うことを聞きました。私は母の死を知らずに1か月も入院していたのです。母の死で私は、悲しみにうちひしがれてしまいました。向かいのおばさんも同じ場所で亡くなったそうです。母は50歳位で、お豆腐屋さんの星さん（主婦）は45歳位の働き盛りでした。父は顔面に負傷し、私も左足に裂傷を負いました。兄、弟、妹は無事でした。兄が、登戸に住む家を見つけ、戦後の生活が始まりました。

戦争は幸せな町や家族を犠牲にします。戦争は絶対に反対です。